

東奈良遺跡出土の送風管について

清水 邦彦

1. はじめに

東奈良遺跡は国内唯一のほぼ完全な形を保った石製の銅鐸鑄型をはじめとした鑄造関連遺物が出土したことで著名である。重要文化財に指定されているものに限っても、石製の銅鐸鑄型が36点、土製の銅戈鑄型が3点、土製のガラス勾玉鑄型が4点、送風管が143点出土している（奥井2014）。ほかにも、高坏形土製品、土製のガラス小玉鑄型、送風管が出土している（濱野1991・清水2013）。これらの遺物は弥生時代中期後半頃に位置づけられるもので、弥生時代における鑄造技術を考えるうえで、重要な資料群である。

これらの遺物のうち、とりわけ銅鐸鑄型や銅戈鑄型が注目され、検討が進められきた。その一方で、他の遺物の検討がなされることは少ない。このような状況のなか、筆者はガラス勾玉鑄型の検討をおこない、ガラス勾玉生産と銅鐸生産の関係、摂津の複合生産体制の東への強い影響を明らかにした（清水2015）。

本稿では、もう一つの注目されてこなかった遺物である送風管の検討を進めるためにも、東奈良遺跡出土送風管の資料紹介をおこなうことにしたい。

2. 東奈良遺跡出土の送風管

本稿で紹介する送風管は5点である。東奈良遺跡出土送風管の特徴を示すよう、曲状送風管および直状送風管の形状がわかるものを1点ずつ、また送風管基部についても異なるものを3点図化した。

図1-1 曲状送風管である。残存長は27.1cmである。外面はケズリ調整である。屈曲部周辺の内側にはさらにケズリ調整が認められ、屈曲による盛り上がりや削ったと考えられる。また、先端の近くでは、曲げる際に触ったためか指頭圧痕が認められる。孔径を測ると、最も基部側で3.3cm、先端で2.1cmであり、基部から先端にかけて孔径が小さくなっていくことを確認できる。また、先端は使用による被熱の痕跡が認められる。外面の被熱は灰白色（10YR8/1）を呈するのに対

して、内面の被熱は橙色（7.5YR6/6）を呈しており、内面はより高熱を受けたことが想定される。

図1-2 直状送風管である。残存長は18.9cmである。外面はケズリ調整で、内面は芯を引き抜いた痕跡を確認することができる。孔径は残存している範囲では、ほぼ変わらない。曲状送風管（図1-1）ほど、先端に被熱した痕跡を認めることはできない。

図1-3 送風管の基部である。残存長は15.3cmである。基部内面をヘラ状工具で漏斗状に広げている。また、内面にはススが付着している。

図1-4 送風管の基部である。残存長は12.2cmである。図1-3とは異なり、基部内面を広げない。一方で、外面に溝を設けている。輪との連結がその用途として考えられる（難波2009）。

図1-5 送風管の基部である。残存長は5.4cmである。図1-3同様、基部内面を漏斗状に広げている。また、外面は図1-4同様、成形・乾燥後ではあるが、浅く溝を設けている。これも輪との連結のためであろう。

3. おわりに

東奈良遺跡出土の送風管について数少ないながらも資料紹介をおこなった。最後に、その特徴についてまとめておく。

まず、曲状送風管と直状送風管の2種が存在することを確認した。また、送風管の基部に着目した結果、いくつかの型式が存在することを明らかにできた。この型式差は機能差に起因すると考えるが、本稿では紙幅の都合上、その詳細については提示できなかった。これについては、別稿を用意している。今後も、東奈良遺跡から出土した鑄造関連遺物を紹介していくことで、弥生時代の鑄造技術や工人集団の動向についての研究に資するよう努めていきたい。

参考文献（五十音順）

- 奥井哲秀 2014 「東奈良遺跡」『新修茨木市史第七巻』
茨木市史編さん委員会 pp.112-183
清水邦彦 2013 『東奈良遺跡の青銅器鑄造-銅鐸鑄型発

見 40 周年記念-』茨木市立文化財資料館
 清水邦彦 2015 「ガラス勾玉生産と銅鐸生産の関係 - 東
 奈良遺跡の事例とその系譜から-」 『森浩一先生に
 学ぶ』 同志社大学考古学シリーズXI pp. 235-244
 難波洋三 2009 「銅鐸の鑄造」 『銅鐸-弥生時代の青銅器

生産-』 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
 pp. 80-87
 濱野俊一 1991 「東奈良遺跡 (90-1)」 『茨木市埋蔵文化
 財発掘調査概要 平成 2 年度』 茨木市教育委員会
 pp. 27-48

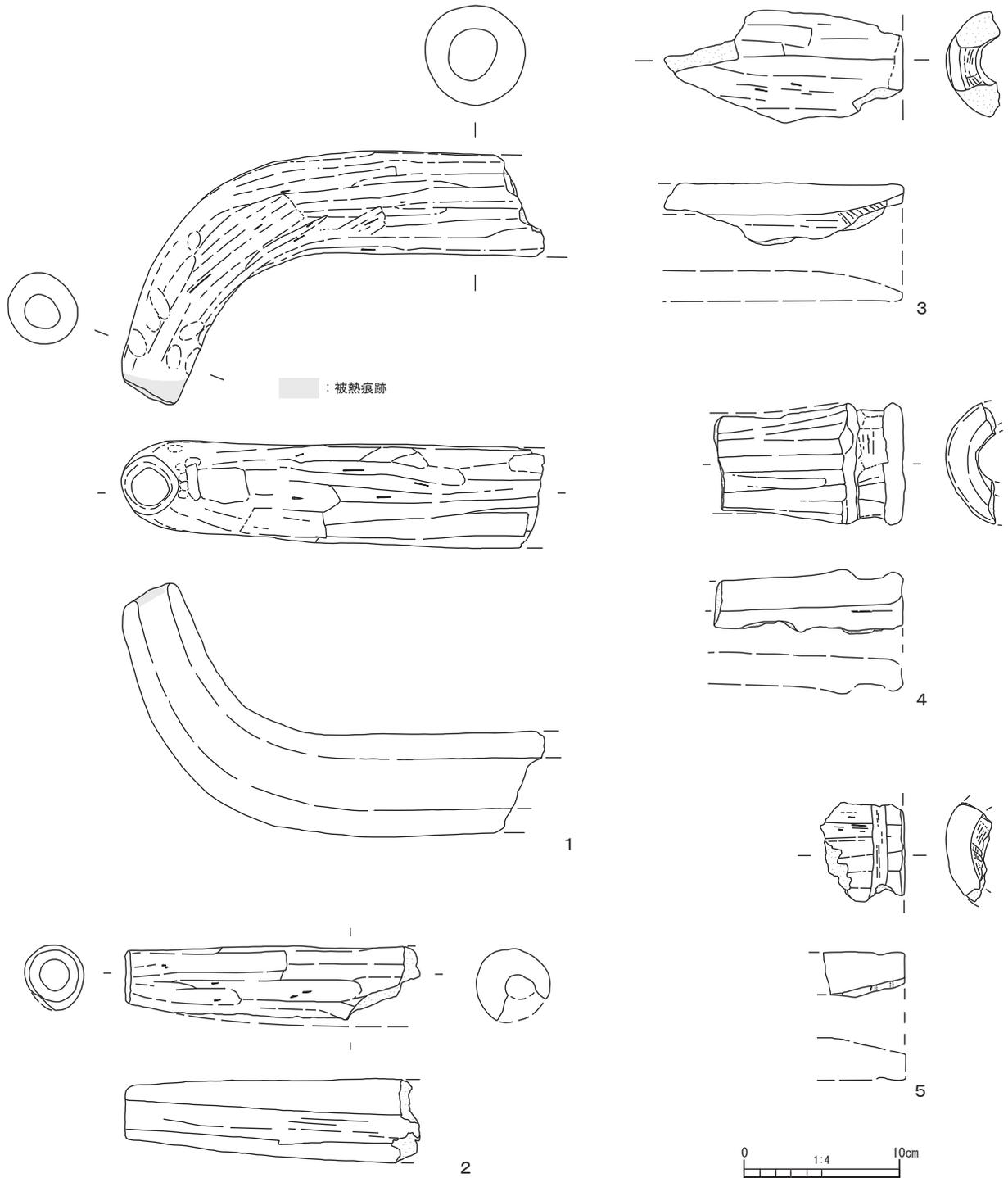


図 1 東奈良遺跡出土送风管

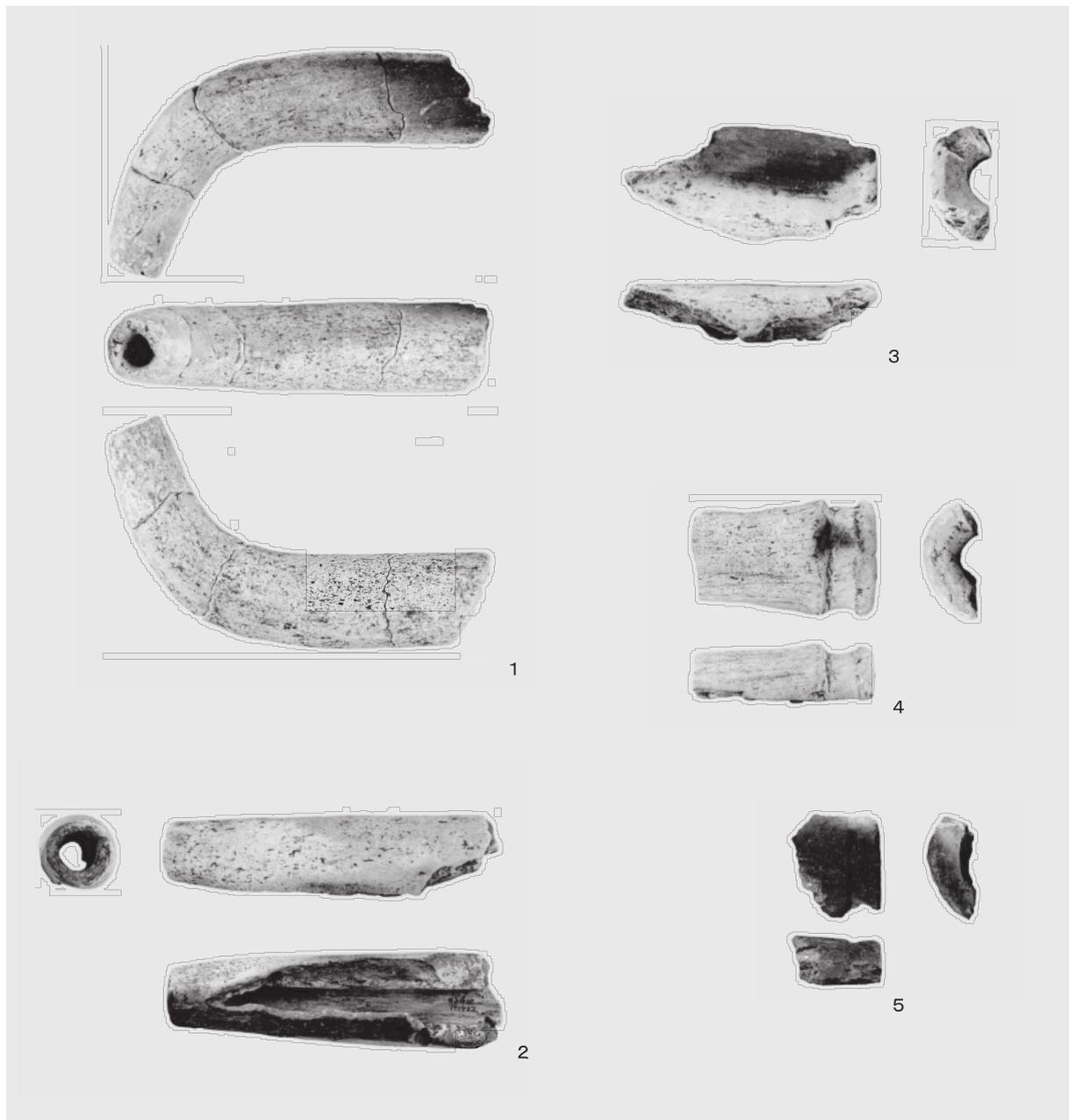


写真1 東奈良遺跡出土送风管（番号は図1と対応）

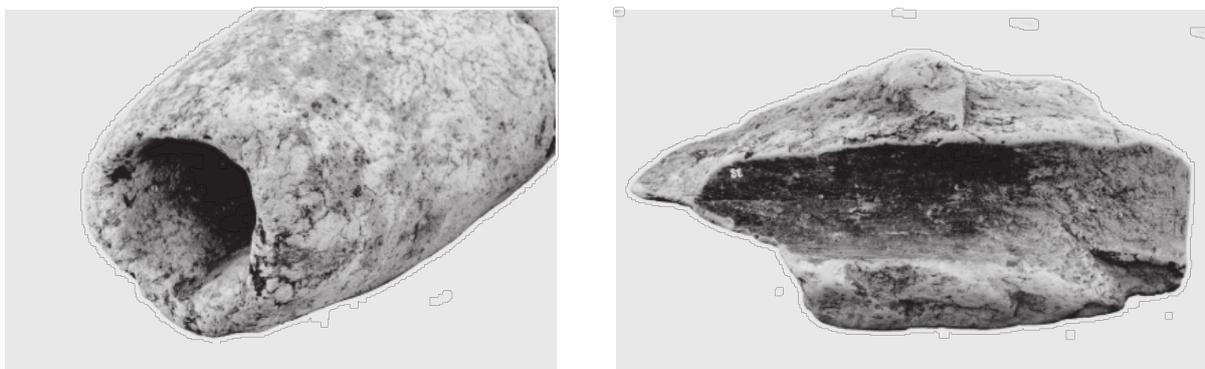


写真2 東奈良遺跡出土送风管細部拡大（左：図1-1先端 右：図1-3内面）